

### Ⅲ 2.

#### 7) 金沢市「子育て生活応援団」へのヒアリング調査

##### (1)「子育て生活応援団」の機能

金沢駅構内には、親子のつどいの広場である金沢市子育てセンター「こどもらんど」があり、市から委託されそこを運営しているのが、「子育て生活応援団」である。「子育て生活応援団」は地元の7つの育児関連団体によって結成された民間団体であり、その団長を担うのが、橋薫氏である。橋氏から、その取り組みについてのヒアリングを行った。

橋氏は、ご自身が双子のお子さんを出産し、その体験から多胎育児サークル「風っ子キッズ」を設立した。この「風っ子キッズ」を中心に活動しながら、県内の約30サークルをつなぐ「育児サークルネットワークかなざわ」へと広がり、それが金沢市の新エンゼルプラン「子育てビジョン金沢21」の中で「子育て応援団」として位置づけられ、結成された。この応援団の発足には、シングルマザーの会、助産師さんの会、がんこおやじの会など、子育てに関連する多様な会とのかかわりが重要であったと氏は述べている。

この応援団の目的として、3点が上げられている。

- ① 子育てに関する相談窓口を一本化して、サポートするための人材育成をめざす。
- ② 孤立しがちな「子育て」がそれぞれの生活の中で自然にはぐくまれるよう、大切な未来の「人育て」につなげていきたい。
- ③ 子どもも大人も、たくさんの人の中で守られているという安心感や、支え合う喜びを感じられる社会作りに寄与したい。

「こどもらんど」の運営と平行して、この応援団にはもう一つ大きな機能がある。それは、子育て家庭が必要とする様々なサポートへの取り組みである。その仕組

みは、市民による無償もしくは有償のボランティアを基本とし、本部隊(事務局)、助けて隊(助けがほしい人)、お助け隊(サポートする個人や団体)、応援し隊(趣旨に賛同する個人や団体)で構成されている。

この「助けて隊」とは、子育て家庭の様々な手助けを求める人のこと。「お助け隊」は、妊婦や乳児宅等への訪問や話し相手、ふたご・みつごの沐浴や授乳の手伝い、簡単なパソコン操作や通信の作成のお手伝いなど、多様なサポートをしてくれる個人や団体が組織されたもの。また、「応援し隊」(賛助会員)には、がんこおやじの会(イベント協力・育児関連サポート)、助産師会、子ども福祉課、児童相談所、市政参画課、議員、個人会員など行政も含めた多様な体制が構築されている。

このシステムは、ファミリーサポート事業とやや類似している。しかし、それとの違いの大きな点は、預かりシステムだけではなく、子育て家庭がいま本当に必要としてニーズに対して、それにふさわしい多様なサポートを提供しうることである。それは、多様な子育て関連の情報がここに一本化しているために、そのニーズを聞いてコーディネートし、最も適した人材や情報を提供できる体制があるからである。また、義務的、形式的なサポートの提供ではなく、ボランティア団体として、その子育て家庭がサポートを必要とする緊急度や事情を優先し、無理せず柔軟で血の通った思いのあるサポートが可能であると言う。まさに血の通った子育てサポートシステムとも言えるのではないだろうか。

具体的なサポート内容としては、大きく次の4点をあげている。

- ①訪問 妊婦、乳児のいる家庭などで、外出困難な場合のサポート。買い物、家事の手伝い。
- ②付き添い 健診時や通院時のサポートなど。
- ③託児 外出時の一時預かり。緊急時の

サポート支援。情報提供 会報誌の発行。図書買出し。

- ④その他 イベント（バーベキュー、海水浴、運動会、ファミリーコンサート等）交流会（母同士、父同士、専門家グループ、市民グループ等の座談会、学習会、交流会）、サイクル、講演会等

#### 預かり機能

「金沢駅こどもらんど」では、休日一時保育を行っている。概要は以下の通りである。

- ①実施日 日曜、祝日  
②保育時間 午前8時～午後6時までの必要な時間  
③利用対象者 概ね1歳～小学校低学年（金沢市の規定で定員5名程度。しかしながら、多少は柔軟に、保育士2名で見られる人数と捉え、サポーター1名追加で7～8名程度可能としている。）  
④利用料金 市内在住者1時間350円、市外500円。（サポーターへの支払いが700円/hであるため、赤字となっている。700円/hでも十分に利用者はいらざるはずであり、保育所の地域子育て支援センターと同額という条件では難しいとのこと。）  
⑤食事 弁当、おやつの持参。

現在は「こどもらんど」での休日一時保育が中心であるが、子どもや親が病気などの家庭、多胎児（2歳くらいまで）の母親や、障がいを持った子の親の場合などの特に心身の疲労度の大きい母親達は、無料もしくは安価の一時保育を必要としている。そのため、近くの商店街と連携して、空き店舗活用の「キッズらんど」（水～金、10:30～15:30、1回2時間半まで）での預かりを行ったり、ベビーシッターとして応援団から人を派遣して（お助け隊登録者）「こどもらんど」での預かりも必要に応じて行っているとのことである。（お助け隊に保育士資格を持った方が多いことも大きなメリットと

なっているようである。）

これほど行っているものの、まだ課題は多いという。様々な理由により、本当に一時保育を必要としている家庭に有効に活用してもらうためには、まだ枠が少なく、対応ができていない現実があるとのことである。そのため、利用者にはなるべく自分自身で子育て中の仲間を作り、預けあいや支え合いを行うなど、地域とつながって少しずつ解決していくような働きかけを行っていくことが必要である。そのため、各地域での中核となるサポーター（お助け隊登録者）が必要であるが、その人材確保がまだ十分ではないこと、またどのようなコーディネートを行うことが必要であるかはなかなか難しいとのことであった。

#### (2)親の子育て力を高めるための支援活動

親の子育て力を高めるために行っている活動も活発である。具体的には、以下のような内容を行っている。

##### ① 具体的な学習テーマ等

- ・トイレトレーニング（この入り口から気軽にはじめて、実は基本的な生活習慣の基礎や、睡眠と体内リズムの大切さを伝えることが必要。）
- ・乳幼児の発達とかかわり（テーマはとっつきやすくするため、子どもへのかかわり方、友達とのかかわり方」等とする）
- ・幼稚園、保育園のこと（「～の選び方」とすると集まりがよい。）
- ・人として、女性として（ステップアップしたテーマだが、実際には夫に対する不満を吐き出す場となる。）

##### ② 進め方について

上記のようなテーマを、ホップ→ステップ→ジャンプで話をし、アドバイスの中から自信を持ち、将来へつなげる。

- ・ホップ 保育なしでガヤガヤしたところから始める。「トイレトレーニング」などはみんなが興味があり、勉強的なことが苦手なタイプも聞く機会

となる。

- ・ステップ 保育してもらい、ゆっくりもう一度聞いたり、質問する。一人ずつ話すことが大切。それぞれの事例に添い、細かく対応、時には参加者全員で考える。
- ・ジャンプ 保育付き2度目。もう少し母親自身の問題に踏み込む。どうすることが今の自分にとって必要か、今後を考え、育児だけに落ち込んでしまわず、自身も子どもにも夢を持つことが大切。

#### 父親参加活動

##### ①パパママバンド

子育て中の父親や母親がバンドを組んで演奏活動を行っている。子育て応援団とも深いかかわりを持ちながら、活動を行っている。音楽活動を通しての親子のつながりと、自己実現の場となっている。このような父親が気軽に参画できるようなサークル的活動があることの大切さを感じた。

##### ②がんこおやじの会

健全育成を行う40歳代から60歳代までの父親の会。主に野外活動を得意とし、親子のキャンプ時の設営を行うなど、イベント時のサポートなどを行っている。世代的には少し上の世代ではあるが、この会では、金沢市が発行する『父と子のふれあい手帳』の編集を行うほか、少人数の集会に会員が出向き、自分達の父親子育ての失敗談等を話しながら、若い世代の親たちとの共に語り合おうという交流ボランティア活動も行っている。パパママバンドとのつながりなど、若い父親世代とのつながりも生まれてきているが、今後、もっと若い世代とのつながりが生まれるような工夫が必要とのことである。

##### ③多様な父親を巻き込んだ取り組み

かかわりのある企業や行政担当者、連携グループ（おやじの会、フリースクール、障がい関連、パソコンサポートグループ）など、できるだけ広場に出向いてもらい、みんなと同じ玄関から入っても

らう。そして、一個人として父親の立場や子育てをサポートする立場の認識を深めてもらいながら、個々の意見も反映する。

##### ④ 土日のオープン

土日をオープンにすることで父親にも来てもらえるようにしている。特に、スタッフの夫も子どもと共に出入りしてもらい機会を持つようにしている。また、イベントの荷物運びや準備時の出入りも父親を巻き込むよい機会となっている。

#### 異世代交流

異世代交流も様々行われているが、ここでは特に次の2つの交流を紹介する。

##### ①小・中・高校生

ユニークなのは、スタッフの子ども達が、託児サポートやイベント手伝いを行っていることである。様々な親子の中で温かく大切にされて育ってきたスタッフの子ども達が、そこに集う赤ちゃんのちょっとしたおもりをしたり、イベントの手伝いを行うような作業を自然と行っている。育てられたものが、次の世代を育てようとする芽が自然と育っていることを感じた。

##### ②障がい児・者

応援団のネットワークには、障害をもつ親子の「サポートハウス」の活動がある。ここでは、軽度知的障がい児を含めた日常生活支援グループの活動が行われており、障がいの親子が共に集い、生活するほか、障がいの有無にかかわらず多様な人たちが出入りしている。様々な人がここを訪れ、共に食事をしたり、宿泊したり、イベントを行う中で交流を深めている。

#### アウトリーチ

アウトリーチとしては、これまでも述べてきたように、本当に支援を必要としている子育て家庭に対して、「訪問」「付き添い」などを行っている。特に、育てにくい子どもを持つ家庭や育てにくい状況にある家庭に対するサポートの必要性

をうたえており、育児サークルネットによる情報収集と身近な人によるさりげない訪問が最も効果的であると述べている。そして、日常的に着実な手助けが必要であるとも述べている。

また、育てにくいタイプの子どもの親に対して、心かける、受け止めることが大切だが、単に甘やかすことではなく、本音で接するところにポイントがある。ただし、これは決して簡単ではないため、訪問者はトレーニングを必要とする。

#### ①多胎児家庭への訪問支援

多胎児家庭では、子育ての困難度も高く、虐待などリスクも大きい。そのような多胎児家庭への支援は出産前から始まるという。特に、出産前に気をつけなければいけないことが多々あるため、実際にスタッフが専門誌を持って尋ね、注意することが必要なことを知らせている。さらに、産まれるくらいにも連絡をし、訪問をすることもある。出産前からかわりを持つことによって、安心感をもってもらえ、つながりも生まれるという。

また、産まれたばかりのときは、リサイクル用品（衣料品、ベビー用品等）などを持って訪問することが効果的であるとのことである。ただ訪問するよりも、実際的な支援であると同時に、安心感を与え、訪問に抵抗がなくなるとのことである。

さらに、同じ双子や三つ子などのいる当事者が訪問することが大切である。子どもの性別等の条件も訪問先と同じくすることによって、共通の話題が増え、支援の受容を容易にする。保健師の訪問では、自分が何かブラックリストに載っているのではないかといった不安があることもあるが、当事者による訪問の場合、親近感が持て、安心感もあるようである。支援される側も支援する人を選ぶことができるという柔軟性もそなえている。

#### ②障がいを持った子の家庭への訪問

この場合も、多胎児家庭と同様、当事者的な存在が訪問したり相談に対応することがとても効果的だと言う。障がいを

もった親でなければわからないような悩みを共有することがとても大切である。特に、応援団では先にあげた「サポートハウス」とのつながりがあり、障がいの種別等によってふさわしい親子のグループを紹介することも可能である。

#### 研修

##### ①定例研修会（こどもらんど）

月1回、10時～12時まで。その後、自由交流。

事例報告は、特に母親に対するかわり方と気になる子どもの行動、最近の傾向などについて。一つの事例ではなく、参加者全員が事例を出し、討議する。進行役はスタッフの当番制、もしくはテーマにより適任者。

参加メンバーはひろば担当スタッフ（見守り、コーディネート、保育担当者）お助け隊の定例研修会も、月に1回、同様の方法で行われている。

##### ②専門家による研修会

専門家による学習会は、子どもの発達、母親への対応、障がい、多胎児等について、年に3～4回。

##### ③課題等

専門的な学習を求めるスタッフもいるが、基本的には毎回同じような内容に思えるようなことが重要。スタッフ同士で時間をかけて長く話しをすることが最も大切だと考えている。そうであるとすれば、専門家による講習のようなスタイルはあまり多くなくてもよいと考えている。

#### (3)まとめ

金沢市の子育て応援団の取組みは非常に驚かされるものであった。特に、子育て家庭が本当に必要とする支援に対して、思いを持った人たちや関係機関、様々な情報が一本化されることによって、このようなサポートシステムが生まれたことの意義の大きさを実感した。実際に思いがある人たちはたくさんいても、それがなかなか有機的に機能しないのが現実である。このような多様な人のつながりや

情報を一本化し、それを柔軟で血の通った支援として機能させるためには、行政的なものでは難しいように思われる。まさに、ボランティアを中心とした市民活動だからこそできたのだと思われる。

特に、本当に困っている子育て家庭へのサポートには、それを実感的に理解できる当事者的な存在が最も効果的であるという言葉は非情に説得力があった。しかしながら、橋氏はただ当事者であればよいとも述べていない。訪問先の親子にどのようにかかわったらよいかは決して簡単なことではなく、それなりのノウハウがあり、研修をした人が行うことの重要性についても触れている。その研修体制も確立されつつあり、きめ細かさも感じられた。それは、当事者だからといって、専門資格を有しない「しろうと」を意味するのではなく、むしろ当事者が思いを共有しやすいふさわしい人材であり、ある意味での専門的な姿勢であるとも思われた。

それは、「こどもらんど」での広場や保育に携わるスタッフについても同様であり、実際に親子にかかわる上で、必ずしも保育士ばかりを配置するのではなく、当事者的な存在も活用している。これも、当事者性を大切にしている点でもある。その研修も単に専門的な知識や技術を学ぶようなスタイルよりも、日常的に広場にかかわる中で気付いた親子の姿を報告することを通して議論を行うといったケーススタディの方法が用いられていた。

また、このようなサポートシステムが生まれた背後には、行政の思いのある方のバックアップがあったことがあることも聞いている。この子育て応援団の活動には、市のいくつも関連機関が協力していることも非情に素晴らしいことだと思われた。そのような意味では、全面的にとは言えないまでも、市民と行政との協働といった側面もある。

先日、金沢に大雪が降り、電車がしばらく動かなくなるということがあった。その際、「こどもらんど」のシニアのボラ

ンティアのスタッフが、駅構内に出向き、親子を中心に寒いので「こどもらんど」でしばらく休んでいるようにと勧めて歩いたという。このような実に自然で血の通った支援が生まれるようなネットワークがこの子育て応援団なのだと感じた。そして、このような多様な団体のネットワークをこれまでコーディネートしてきた橋氏の働きがいかにか大きく、懐の深いものであるかを実感させられた。

### III 2.

#### 8) 江東区子ども家庭支援センター「みずべ」へのヒアリング調査

江東区子ども家庭センター「みずべ」は、江東区の委託により社会福祉法人雲柱社が運営、公設民営にて1999年に開所、以来地域の親子にほっとできる居場所を提供し、数々の相談にも対応して、多くの転勤者や若い親子への支援の拠点となっている。遊び・ふれあい、育てあい、学びあい、支えあいのひろばとして、さまざまなプログラムを展開、2003年度は一日の平均来所者が約65組、電話および面接による相談件数は1333件となっている。(江東区東陽子ども家庭支援センター 2003年度事業報告書) 2003年6月には大島子ども家庭支援センター、第2のみずべが誕生している。

中心となるのはプレイルーム、乳児、1~2歳児を想定したおもちゃが準備された畳やカーペット敷きのコーナーのある広いスペースで、親子が思いおもいに過ごす場である。少し大きい子どものための大きい積み木や体育的な遊具も備えてある。昼寝をさせられる畳の別室、廊下の隅に絵本など落ち着いて本が読めるコーナー、コーヒーが飲めて談笑できるコーナーなどもある。エレベーターを降りたとたん、にぎやかで暖かい雰囲気を感じるロビーがあって、初めての人には丁寧な説明がなされ、内部が案内される。

本研究のための、支援者としてのプログラムのあり方等に関するヒアリングは、2003年10月22日、勤務終了後3時間ほど行われた。両みずべのスタッフに、長い間地域子育て支援センターとして実績をあげてきた同じ法人の神愛保育園のスタッフを加えて11名が参加して座談会形式で行われた。

結果的に、プログラムよりはひろばのあり方にかかわるスタッフの考え、姿勢について話し合うことになった。アンケートに書かれた記述の内容を含めて、以

下にその要約を記す。

#### (1)ひろばとスタッフがいる意義

神愛保育園が地域に開く支援センターを開所した当時、人を集める、人が訪ねてきてくれるようにと、いろいろなイベントをやった。しかしそのためにスタッフが忙しくなって、ゆっくりと親子にかかわれなかったり、大勢が来ることでくつろげない、来るのが億劫になる親子が出てきたりで、方針を変えたいと考えるようになった。そうした中、プログラムはいらないから何でもなく話ができる場がほしいという声に、講座などを減らしてゆっくりとなんでもなく時間がすごせるようにした。その結果、大体の親は満足して、どかっと座って話をするようになった。こうしたひろばがベビーカーで気軽に行ける範囲にたくさんあることが必要と思う。

ひろばでは子どもが安心して遊べることが大切で、したがって人が多すぎないことが親にとっても大切になる。空いているときのほうが、スタッフが見ても今何をしたいのか、つまり相手のニーズが見えるという。ひろばが、来ている人のニーズに答える場となるためには大事なことである。なんでもなく話ができる、安心して時間がすごせることが大事で、親にとっては話すことが予防になるのだ。

ひろばは人と出あったり、何でも話せる場であることが大切で、そのための時間が使える、つまりプログラムをこなすのではなく基本的にはノンプログラムであることが必要だ。何かをしたり参加をしなくてもよい、居場所であることも大事な機能である。そこにはスタッフがいるところが公園とは違う点であろう。

#### (2)スタッフの姿勢

ひろばにはどんな人つまりスタッフがいるか、は非常に重要である。スタッフは指導者やしつけをする人ではなく、寄り添う人である。支援者として入る先輩親の中には、自分の子育てがうまくいか

なかった、つらかった、だからやり直しをしようとするのか、今ならうまくいくのではと過剰にかかわっていく人がある。そうした人にも身近な人材として付き合い合って、話し合っていくと変わっていくこともある。子ども同士の取り合いでも注意しないで見守る。欲しかったんだね、という言葉かけを聞いて親が変わっていく。親が知らなかった対応をするスタッフから親が学ぶのである。

スタッフの立場にとしては、コーディネーターやファシリテーターとしての発想が求められるのではないか。ボランティアや親自身が生き生きして元気になれるよう、それを支える役を執りたい。何かをしてあげるのではなく、親が自主的にやっていくのを支えることだが、その前に一緒にいる、やるということが必要かもしれない。

はじめは受け止めることが必要か、甘えたい、頼りたい気持ちを受け止めて欲しい、それを求めてくる人もいる。「先生」として介入を求められる、スタッフそれぞれに違ったものを求める人、などからは、一緒にかかわり、十分コミュニケーションをとり、過程を共有していく必要を感じる。目標は子育てに向き合う親になってもらうことなのだが、一人ひとりとの距離のとり方の問題かもしれない。

### (3)スタッフとボランティア

みずべでは 60 名ほどのボランティアが登録して、来られるときに来るという無理のない態勢でひろばに入ったり、講座中子どもの保育を引き受けたり、花の水遣りなど必要なちょっとした仕事を引き受けたり、講座を手伝うなど、それぞれに多様な活動に参加している。

親子に直接かかわるボランティアとスタッフとはとくにコミュニケーションを密にとっており、日常的にはもちろん、時々会を持って交流に努めている。一緒にやっていくこと、互いに影響しあうことをねらいとして、それぞれが気づく場を作っている。

講座終了後には時間をとって、預かって担当した子どもについて報告しあっている。連続講座の場合は同じ子どもに同じ人がつくようにしているの、回ごとの子どもの様子と変化がわかり、それをボランティアとスタッフが共有することによって意義がある。研修にも力を入れており、2 組の親子の事例を出して皆で考えを話し合ったりしている。こうした実践によってスタッフもボランティアも育つことができるが、時間を要することであり、忙しい実務の中ではかなりの努力が要ることであろう。

### (4)一時預かりと相互預かり

ひろばは通常親と子が集まる場であり子どもを保育する場ではない。しかし一時に子どもを預かる必要は感じている。とくに第 2 子を妊娠中の検診、入院等の場合は必要度が高い。受け入れられる状況が作れたら、早期に実現したい。ただしスタッフの人数に課題があり、他の親たちの前で特定の子どもの預かることに、厳しさがあるし、連携にも十分な配慮が求められるだろう。

講座等で子どもを預かる場合はボランティアやスタッフが 1 対 1 でひろばの中で担当している。親でなくスタッフがっている子どもには他の親たちの目が向きやすい。ひろばは子どもにとって日ごろ慣れている場であることが多いが、親と離れ慣れない子どもはやはり泣き通しのこともある。あんなに泣かせてまで講座を受けるのか、といった声も聞こえてくる。担当者としては預かりを他の部屋でやりたいという声もある。

親が講座を受ける間、大人同士で語り、学ぶ機会の保障するために、子どもが慣れたひろばであっても預けられることがつらいだけの経験にならないよう、保育上の配慮には心を砕いている。受け取り時の必要情報の記入、時間をかけた受け取り、必要なときは親に返すなどは柔軟に行っている。初めは気になっている子どもの泣き声等であるが、子どもが落

ちついてくる時間の経過とともに、親のほうも佳境にはいっていくようだ。その間ひろばで担当者と過ごす時間を楽しむ子どもも出てくる。

ひろばにいて、短時間預かりあうことは奨励されている。一人でよその子を見ているというよりは、スタッフや他の親たちの目と手のある中でのことである。すべてが自分の肩にかかる自宅で見ているよりはやりやすいと思われる。講座によっては、半分の親が残って子どもを見合い、交代して講座に入る試みも行っている。人の子どもを見るということで、学ぶことがあるようだ。この相互預かりは、ひろばでスタッフやボランティア立会いの下で、もっと行われてもよいのではないだろうか。

#### (5)親のニーズについて

支援するということはまずはその相手のニーズに応えること、であるだろう。たとえば休館日が月曜日であることについて、図書館等他の公的機関も休みで、どこにも行くところがなくて苦しいという声がある。休みをずらして欲しいという要求が出てくる。それほど家にいられない住宅事情、孤立があるのだろうか。毎日どこかに出かけることが習慣なのか義務になっているのか、と思わされる状況である。毎朝起きると「今日はどこに行くの」と聞く子どもがいるらしい。親のほうも、友だちのいるところに連れて行かなければと思うらしく、出かける先を求める様子がある。

そうしなければうまく育たない、育てなければならぬ、失敗したら親のせい？といった思いがあるという。そこで何か、プログラムを求め、イベントを志向する。プログラムは何もやらない、という事態になじまない、どんなイベントをやるのかという問い合わせ、何もないので、遊びだけですか、といった言葉が聞かれる状況がある。～や～をしてほしい、～～では～をやっている、などのリクエストが来て、ニーズに応える

とは何かとスタッフは悩むという。

今の親は、教わることばかりを求め、自分では何をやりたいのか、やったらよい分からない人が多いという。したがってハウツウ的なもの、実用性、知的のものを求めるようだ。その結果、目に見える効果を求めたり、プログラムに振り回されるだけで終わる結果になることもあるのではないか。

#### (6)親の子育て力を高める

子育てに関する講演会をはじめとして、「ノーバディズ・パーフェクト」を基本としたグループ懇談会で、関心の高そうなテーマ、たとえば「お父さんの子育て」「家庭内のコミュニケーション作り」などについて連続2・3回話し合う。ひろばのあれこれを話し合う井戸端会議、年齢別グループ講座、子育て塾、みずべ会議など、それぞれ必要なテーマを設けて、スタッフが加わって親たちが意見交換する機会を多く持っている。

この中で、親たちがいろいろなことに気づき、互いに学んでいく、親たちが本来持っている力を発揮してもらおう大切さを感じる。自分の意見を話し合う、自己表現力を高めることは大切、同じ思いを持ったもの同士が集い、お互いを尊重し、自分を出せる空間を守っていきたい。

父親が参加する活動として、「お父さんとカプラで遊ぼう」「お父さんの木工教室」「お父さんのベビーマッサージ」「あそびの広場」「誕生日会のお父さん、お母さん相互のメッセージ」などを行っている。土曜日のひろばへは父親の参加が少しずつ増えて、父親がいる光景に違和感がなくなってきた。金魚の世話係のお父さんも現れてきた。

#### (7)地域に広がる

地域の子ども、学童、中学高校生、いろいろな人材が、ひろばにボランティアとして出入りしている。子どもと遊んだり、イベントの手伝いをしてもらったり、

ボランティア講師として講座などを開いてもらっている。スタッフだけでこれらをこなすには限界があり、多方面の力を借りることで、活動が広がるのが大切である。

アウトリーチとして、ひろばに来られない人を家庭に訪問したり、双生児の場合や来てもらいたい家庭に迎えに行ったり、ひろばに来てもらうこともやっている。

子どもの人口が多く、ひろばのニーズの高い豊洲地区で、出張ひろばを開いている。これには民生委員やボランティアの協力があってできている。アウトリーチが地域との連携でできている例である。

保健センターの両親学級で、出産前の親たちにアピールをする広報活動を行っている。電話相談で、仲間のいない人、本などからの知識重視の人などに、ひろばへの参加を勧めている。

#### (8)相談活動

日ごろのひろばでのなにげない相談、別室で予約をしての面接相談、テーマを決めて集まった人たちのグループ相談、電話相談を日常的に行っている。他機関からの紹介も多い。電話および面接の相談者は 2003 年度 653 人、相談件数は 1333 件にのぼる。

相談についてはそれを受けたスタッフが解決するというものでなく、一緒に考えていくという姿勢をとる。相談者に対する思いやり、スタッフ自身の謙虚さなど、カウンセリングマインドを常に心におきたい。自分たちで対応しきれない人については、他機関へつなげていく冷静な判断力と連携が必要である。相談してきた人の内にある力を信頼し、見つめていく力など、基本的人間性の研鑽が必要である。

#### (9)支援者の専門性を高める研修

ひろばには連日いろいろなことが起こる。相談も多く、ボランティアや他機関との連携など、スタッフには多岐に渡る仕事、とくに人間関係にかかわる対応が

求められる。日ごろからミーティングをたびたび持って話し合いを重ねているが、研修にも熱心にとりくんでいる。

①カナダのファシリテーターについてのワークショップ、関連保育所職員との合同研修として、各 3 時間を 3 回行った。支援施設では、参加者に対して伴走者としての役割が求められることから、こうした研修は必要になっていくと思われる。

②子どもの発達や育ちにかんする専門家を招いての研修。ボランティア、地域の関連支援者も参加する。年 5 回ほど。

③ボランティア研修、スタッフも交えて年 5 回ほど、講師から話を聞くなど。その他についても、子どもの問題だけでない幅広いテーマで、ファシリテーターとしての資質を高めていきたい。

#### (10)障害のある子どもへの対応

障害のある子どもは発見が早いほど、療育を受けることになって普通の生活がしにくくなる。訓練を受けているのにほかの子がこんなに進んでいるのを見ることになる。ひろばに出てきにくい。他の人がそうした子への接し方が分からないので、大勢の中に出ることは遠慮してしまう。ただ声をかけてもらえれば来やすくなる。空いているときを教えてもらってそのときに来る、訪問をしてもらえればありがたい、などのニーズがある。

#### (11)その他、大切なこと

人にかかわる仕事であり、コミュニケーション力をつけていくことが大事である。人が大事、時間をかけることも大事なことだが、目に見えないことなので予算がつかない。行政の理解が欲しい。

子育ての親たちに安心していただける、自分を開示できる場を提供したい。その中で親も成長できるのではないかと。

スタッフの学びが必要。事業の目的は何か、何のためにやるかの共通認識をもつことが、何よりも大事なのではないかと。

## Ⅲ 2.

### 9) 横浜市 NPO 法人「びーのびーの」へのヒアリング調査

2003年12月26日(金)、アンケートへの回答内容を踏まえ、びーのびーのスタッフ8人との座談会形式のヒアリングを行った。以下は、アンケートへの回答も含め、その内容をまとめたものである。

#### ①「びーのびーの」の概要

「びーのびーの」は横浜市の NPO 法人の親子のためのひろば(つどいの広場事業)である。2000年に、子育て真っ最中の母親たち20名が商店街の空き店舗を利用して立ち上げた。

月曜から土曜(土曜は月1回)までオープンする常設のひろばである。スタッフは約30名(子育て中の母親が中心)、子育てサポーター約20名(中高年者が中心)、学生ボランティア登録者約40名によって運営されている。

1日平均約13組、月におおよそそのべ250組の親子が利用している。利用者は会員となって月会費3000円を支払う。

活動内容としては、ノンプログラムのひろばを中心に、絵本の読み聞かせ、親子体操、ベビーマッサージ、外遊び企画、素材工作、リトミック、手遊び、マタニティクラス、座談会、連続講座、発達相談などを行っている。

#### ②ひろばでの一時預かり

現在は行われていないが、検討中とのこと。親の体調が悪いとき、通院時など、あるいは美容院に行くなど、リフレッシュ機能としても必要。ひろばでもかなり疲れている親も少なくなく、短時間でも親が一人になれる時間が必要である。中には、預けることに罪悪感を感じている親も少なくない。

ひろばに問い合わせもあり、孤立している人の窓口対応も行っており、預かり機関の資源を紹介したり、つなぐ役割もあるとのこと。

子育て当事者としては、いつも慣れ親しんでいるひろばで預かってもらえるのであれば、親子ともに安心感がある。しかし、実際には、人的、スペース的な条件がそろうことが必要である。近くの別室がよいのか、少し離れた場所がよいのか、先行事例を知りたいと考えている。

また、同室預かりの場合、同じスタッフが日によって預かりの立場だったり、ひろばのスタッフだったりすることによって、親子が戸惑うことがないのかといった問題もあるように思うとのこと。

#### ③親の子育て力を高める

基本的にはひろばに集う中で、他の親子を見ることによって学ぶことの意味の大きさがある。それは、少し大きな子を見ることで、発達の見通しが持てるようになることなどである。

また、気の合うスタッフと気軽に話すことで悩みが解消されたりするなど、日常のひろばでの交わりの中に、親の子育て力を高める要素がある。

午後のティータイムでの交流や、「すぐ手を出す子」「泣いちゃう子」などの単発的な座談会形式の話し合いを、よく行っている。また、連続講座として、幼稚園選びについて考える勉強会をしたり、子育てに関する講演会としては、幼稚園選び、保育園選びを行うためのシンポジウムを地域で行っている。

#### ④父親参加

仕事で忙しく時間が取れないが、平日でも保健所健診に来る父も増えている。しかし、平日にひろばに顔を出す父親は決して多くはない。土日のイベント時などに家族連れで来る父親は多い。また、スタッフの父親も影ながら、運営を支えているという側面もある。

父親向けの連続講座を行ったが、本音を出す話し合いになることは難しかった。女性に比べて男性は、フランクに話すことができないなど、人とかかわることの壁も大きい。

父親たちのサークル的活動として、「劇団パパビーの」が行われている。ひろばのイベントや地域のイベントにも参加し、子どもたちにも喜ばれている。職場の枠を超えた付き合いの場ともなっている。課題としては、仕事に忙しい方が多く、集まりを持つことが難しい。メンバーがあまり増えないことなどがある。まだまだ、父親が自主的に活動するには、様々な壁がある。

#### ⑤地域・異世代交流活動

立ち上げから、中高年のサポーターによる支えが非常に大きい。子どもの面倒を積極的に見てくれるサポーターさんや、ひろばの木の手作り遊具を作ってくれるサポーターさんなど、実に多様である。

大学生などの学生ボランティアの数が非常に多い。特に、男子学生も多く、親子から非常に喜ばれている。子どもにとっては、元気な若者に全身で遊んでもらえることがとてもとてもうれしい存在である。また、親たちにとっても、自分たちとは違った遊び方をしてくれることへのありがたさがあると同時に、異世代と交流できる魅力もある。ひろばでは、日常的に学生ボランティアがいるため、親子からのみならず、スタッフからの信頼感も大きい。

ただし、学生ボランティアに課題がないわけではない。私立の中高生の場合、受験目的のボランティアがある。また、若者の言葉遣いの問題も多少あり、どのように伝えていくかといった体制の検討も必要である。

小学生の出入りも多い。夕方には、スタッフの子どもが集まってくるなど、何かとひろばにかかわっている。小学生向けの土曜日企画（文化体験型のプログラム）もあり、参加も多い。小学校の授業で訪れるケースもある。

このように、親とは違う様々な世代の人とかかわりが持て、一緒に育ち合えることがとても大切だと考えている。

ひろばに来られない人への対応

主に、親子とひろばをつなげていくような工夫が中心。

見学に来た人にはがきを送ったり、イベントやバザーの案内のファックスを送ったりすることを通して、ひろばに来るきっかけを作る。また、年1回の同窓会や、しばらく来ていない人に月1回電話をかけるなども行っている。継続して働きかけることが大切。

主張活動としては、福祉保健センターが行っている赤ちゃん会に出向き、親子で楽しめる遊びを提供している。このような活動を通して、ひろばにつながる親子が出てくる。

民間のひろばとして、どこまでできるか、あるいはすべきなのか、迷いもあるとのこと。行政との連携が不可欠である。

#### ⑥相談

専門家による相談と、日常的な会話の中での相談を行っている。個別に相談したい親を見逃しているのではないか、いつも気になっている。ひろばの中では話しにくいのか、個別に相談したい人が土曜日をねらって来ることもある。

スタッフがどこまで相談を引き受けたり、共有することができるかは大きな課題を抱えている。相談してきた人に対して、勝手に解決したように話してしまうスタッフの対応の実態もある。専門家との連携をいかに持っていくかが大きな課題である。

#### ⑦研修のあり方

最近では、講演を聞く形式の研修ではなく、スタッフ同士が話し合う研修を最も大切にしている。月に1回、「みんなで話そう会」を行い、ひろばで課題になっている点を様々な視点から話し合い、スタッフ自身が自ら気づきと意欲を持てる場を目指している。

立ち上げからのスタッフと新しいスタッフの差があり、この溝を埋める機会としても研修が大切と考えている。ひろば

を大事にすることの認識のギャップがあり、何を大事にするか、その意味を考えていかなければならない。話す時間があることで、やっと分かってくることがあるため、話し合うことが最も大切。

また、週1回、ひろばの内容を振り返りながら、ひろばの話題や親子の様子などを共有する「ふりかえりミーティング」を大切にしている。

研修のあり方は、試行錯誤が多いとのことである。

#### ⑧その他

びーのびーのでは、昨年、大学生の家庭派遣ボランティアを試みとして行った。これは、異世代交流という面でもあり、アウトリーチという面としての機能ももっている。

このような学生派遣などは、学校との連携が欠かせないことに加え、コーディネーターの役割が重要であるという。特に、びーのびーのでは、学生との連携に関して、特にそれを中心に行うスタッフがおおり、そのつながりの中で、学生がひろばに親しみを感じ、思い切り自分を発揮しているように思われた。

どのようなプログラムでもそうだが、スタッフがいかに温かさを持って親子をサポートしたり、人と人とを結びつけていくかがとても大切な面だと感じられた。

びーのびーのでは、学生との連携など、地域の中で様々な人が支えあうことができるような工夫が随所になされている。そのような様々な人と人とをひろばにつないでいくような様々な活動のノウハウは、子育て家庭への支援プログラムにも反映させるべき点が多いように感じられた。

### Ⅲ 3. 子ども家庭支援プログラムへの提案

Ⅲ 3. では、2)以降に11のプログラムを提案する。「ひろば」という日常的な親子の居場所を基盤として、必要に応じて実施するものである。また、ひろばが、常にプログラムを実施する場であり、常に何かをやっているなければならない場であることを示すものではないことを、はじめにお断りしておきたい。

ひろば等でこれらのプログラムを実施する場合は、このノンプログラムのひろばが、日常的にあること、そこで安心して何もしなくてもよい場が保障されている上で、必要に応じて行っていただきたい。

他のさまざまな機会において、単発で実施できるプログラムの利用についてはこの限りではないし、趣旨を汲み取っていただいた上で、実践の中で参考にしていただければ幸いである。

#### 1) 常設でノンプログラムのひろば

##### (1) 常設であること

国の「つどいの広場」における広場とは週3日以上以上の開設が条件になっている。乳幼児を連れての外出は、大人の外出とは違って手間がかかり、心身の条件に左右されて予定や日時を合わせることもままならない。時間限定ではなく、いつでも行けるときに開いていることが大切である。そのためにはひろばが常設であることが望ましい。

当初「子育て支援」と考えられて実施されてきたことは、親子が集まって何か楽しいことをする、託児つきで有意義な話を聞く—この場合は子どもとはなれて大人の場にいられるというメリットがあった—などであった。つまり時間限定のイベント型であったことは否めない。

常設であるほど、そこでいつも何かをやっていることは難しくなることが考えられる。人を集める、親子に来てもらうためには、何かをやらなければならないというのがこれまでの考え方であったし、利用者

側もイベント型に慣れていて、何かをやってもらふことを期待して一時の楽しみを求めて渡り歩くこともあったと聞く。

常設のひろばは、一時の楽しみを与えるだけの場ではない。そこに来て、居ることそのことが価値がある、というような場となることが大切である。乳幼児の親子が好きな時間、居られる場とはどんなところだろうか。

##### (2) ノンプログラムとは

ノンプログラムとは、とくにプログラムを設定しないで、自由に過ごしてもらふことといえる。ひろばには、安全に配慮され、自由に使える設備、おもちゃや空間があって、どこで何をするかは自由である。好きな時間に来て、帰りたいときに帰ることができる。

ひろばにきて何をするか、時々設定されるプログラムめがけてくる日以外には、とくに目的はなくてもよい。家で二人きりで煮詰まることから開放され、いろいろな人と出会うことができる。はじめはわが子しか見えなかった親が、よその子どもにも目が向くようになって、気になっていることがわが子だけのことではないと知ることもある。他の親の話をそれとなく聞き、子どもへの接し方を見ていて学ぶことも多い。

子どももよその子どもと一緒に遊ばなくても、見ている、真似をするだけでも楽しく、意味があることがある。今できないことでも、できるようになったら始めるために、予習をしているのである。

ノンプログラムのひろばでは何よりも自由で、好きなように過ごすことができる。イベントで何かすることが決められていると、やりたくないことも一緒にしなければならぬ。それが終わって、もっと居たくても帰らなければならない。人のペースに合わせる事が多く、自分のペースで自分なりにするわけにはいかないことが多い。

与えられることに慣れた人の中には自分が何をしたいのかが分からずに、何も

してもらえなかったと嘆く人もいる。いつも何かを与えられて、やった気持ちになっている人は、指示されないことで不安になる人もいる。ノンプログラムに慣れない人ははじめ戸惑うようだ。しかし慣れてくると、自分が望んでいることが何かを見つけ、その中で自分なりの過ごし方をすることの心地よさを知るようになっていくようだ。

### (3)環境設定

ハード面では、気持ちよく清潔で、子どもが安全に遊べる広さや設備、おもちゃ、絵本などが揃っていることがまずは必要である。親にとってはゆっくりとくつろげて、子どもの世話が楽にできる設備、おむつ交換や授乳のコーナー、持参の食事やお茶の準備もできるキッチン、昼寝がさせられる静かなスペースなどが必要である。大人同士が心置きなくおしゃべりできるソファやテーブルがあれば、子どもを見守りながらゆっくりできる。床は滑らず、カーペットや畳のコーナーや部屋があればくつろぎやすいだろう。

### (4)情報を得る場

子育てに必要な情報が得られるよう、壁の掲示や資料がそろっていることが望ましい。スタッフの手をわずらわせなくても、来たときに必要な情報を手に入れられるように、情報が整理して置かれていると親も探しやすい。親たちが、何人かでおしゃべりする中で互いに役に立つ知識や情報を得ることもある。

親が関心を持ちそうな本を用意しておく、家ではなかなかできない読書を楽しむこともできるが、あまり没頭してしまつて子どもを忘れない程度のものにした。親子で楽しめる絵本があれば、子どもとコミュニケーションをとるよい機会にもなる。

### (5)人の中で学ぶ

ひろばは出会いの場である。居心地の

よい空間で親も子も人と出会うことに大きな意味がある。子ども同士、親同士が友達になるきっかけを得ることも多い。

子ども同士が出会い、遊び、まねをしたり教わったり、物のやり取りをし、逆に取り合ったりする。やったりやられたりして、楽しいことやいやなこと、悔しいことも経験する。痛い目にあえば手加減することも覚えるだろう。どのくらいやってもよいのか、程よく見守ってくれる大人がいれば、互角に向き合つて相手との距離のとり方も分かっていく。

子ども同士のトラブルは親にとっても試練である。それを避けて子どもたちをすぐに引き離すだけでは子ども同士の関係は育たない。子どもに任せてしばらくは静観する姿勢が、親にも必要である。親同士が子どもたちにどうかかわっていくのか、互いに了解していく雰囲気を作っていく必要がある。親同士が育ちあうために必要なことである。ひろばでの日常的な場面でのこうしたかかわりは、人とのかかわりを学ぶ貴重な場であるといえる。

### (6)スタッフの役割

ひろばでの人のかかわりを見守り、雰囲気を作るのはスタッフの役割である。ノンプログラムの中では、親の目の前で適切な対応をするモデルでなくてはならない。ノンプログラムの中で、スタッフは何もしていないように見えるが、気遣いはしている。目立たず、全体を見渡し、どこで何が必要かを判断し、適切な対応をするファシリテーターの役を執るスタッフの存在は欠かせない。

来ている親子それぞれが何を求めているか、何が必要かに気づく感性と、そのニーズに応える供えを持っていることが求められる。深い自己研鑽が求められる存在なのである。

### Ⅲ 3. 2) プレママ・マタニティー

#### 趣旨

現在出産をするまで赤ちゃんに触れ、抱いた経験や世話をした体験をもたないまま、初めての出産、育児をする女性が増えており、多数の女性とその様な状況であろうと考えられる。

特にはじめての出産の場合、赤ちゃんが生まれてから不安なこと、わからないことや心配なことなど、いつでも話をきいてくれ、適切なアドバイスがもらえる人と場が必要である。そこに行けば先輩ママがいて相談できるという場があるというだけで、とても気が楽になり、安心できるのである。

#### 目的

出産前に実際に赤ちゃんとおふれあい、子どもの世話をしている新米の母親（プレママにとっては先輩になる）の話も見聞きしながら、家庭の中で子どもと二人だけの生活ではなく、ボランティア、スタッフ、他の母親たちに見守られ、かわりを持ちながらひろばで過ごすことを体験する。また、仲間がたくさんいること、決してひとりではないことを感じてもらおうことが、本プログラムの目的となる。

#### (1) 日常的なひろば体験

##### 実施方法

##### ① 対象

出産を控えた妊婦とその夫

##### ② 募集

保健所で行われている両親学級などで広報し、勧誘を行う。「赤ちゃん誕生をひろばのみんなが楽しみに待っています。遊びにきてください。出産前後、困ったこと、心配なことについては先輩ママ、スタッフ、子育てのパートナーとなるボランティアさんがいつでもお待ちしております。赤ちゃんのお誕生前に赤ちゃんを身近に感じ、一緒に遊んだり、先輩のお

母さん方から、あんな時こんな時のお話を一緒にしてみましよう。」といったお知らせを作成しておく。

それを両親学級の中で説明、保健所との打ち合わせの中で、できれば直接ひろばスタッフが出向き、地域に共に育てあうひろばがあることと、ひろばの活動内容をお知らせする。その際、保健師・助産師の協力が得られるとよりよい。また地域の産婦人科を回り、ひろばの案内パンフレットと共にプレママのひろば体験へのお誘いチラシをおいてもらう。

##### ③ 開催

基本的に来所はいつでも可とする。しかし、プレママ同士の交流や知り合う機会ともなるので、月に1回～2回程度日を設定する。

##### ④ 活動の進め方

日常的に親子がつどいあう、あそびのひろばに自由に入ってもらい、他の親子と身近に接する。

スタッフあるいはボランティアが案内をし、必要と思われるプレママには、一緒に寄り添いながら他の親子を紹介し、赤ちゃんを抱くことなどをさせてもらう。

またプレママ体験のプログラムと0歳児の母親の「ホッと一息 ひとりでティータイム」といった企画を同時に組み、スタッフ、ボランティアと共に子どもを短時間預かり、赤ちゃんの休息を兼ね、お茶を飲みながらゆっくりと過ごしてもらう。

⑤ 帰りの際には、プレママひろば体験の感想を短時間でもよいので、スタッフ、ボランティアと共に懇談し、皆で出産を待ち望んでおり、子どもと一緒に来所を楽しみにしていることを伝える。

⑥ 一回だけの参加で終わるのではなく、フォローアップとして継続的につながりがもてる様、出産前でも参加出来るプログラム（例：赤ちゃんマッサージ、お話し会など）があれば参加を誘ったり、ひろばのお知らせを郵送していく。

#### 留意点

- ①初めての場を訪問するには緊張を伴うので、受け入れの態勢はなるべく余裕をもち、きちんとした準備が必要である。
- ②まずスタッフによる、ひろばの説明や、案内を丁寧におこない、ひろばに入った際には、プレママの参加者とわかるように、エプロンや名札をつけてもらう。プレママ参加者と周囲からわかることで、話しかけてもらうきっかけにもなる。
- ③すべてのスタッフとボランティアにも紹介しておき、他の母親との話ができる橋渡し役となるように留意する。
- ④参加したプレママの近所に、ひろばに通っている先輩親がいれば、了解を取って紹介しておく。困ったときの連絡先に持っているだけでも安心してもらえる。

#### (2)助産師さんを囲んでのグループ相談

##### 趣旨と目的

とくに初めて出産には不安が伴いやすい。助産師や先輩親の体験談を聞いておくと、心構えができて安心できることが多い。夫とともに参加できれば、妊婦の安心感はさらに大きくなる。

プレママ・パパの妊娠中の不安や出産に向けての不安を軽減し、大事にサポートされているという安心感を持って出産を迎え、育児への気持ちの準備をしてもらうことを目的とする。

##### 実施方法

###### ①対象

妊娠中のプレママとそのパートナーに参加を呼びかける。相談者としての参加だけではなく、他の人の話を聞く等の参加の仕方でも可とする。プログラム(1)に参加した先輩親にもそのフォローアップをかねて参加してもらい、出産の経験や育児について語ってもらう。

###### ②準備

くつろいだ雰囲気やリラックスできる場面を作り、途中にお茶の時間を入れる準備をしておく。

③保健師さんを囲んで、自由に質問したり話を聞いてもらうが、スタッフが堅苦しくない進行役を務める。

母親たちが0歳時期の子どもの生活でどの様な事にとまどい、悩んでいるか、また自分の身体ケアなどについて話しあうところに同席するだけで、妊婦にとっては大いに今後の参考になるはずである。また出産に向け、助産師だけでなく、先輩たちからのアドバイスも心強いはげましとなることであろう。

##### 留意点

- ①助産師を囲んでのグループ懇談会は、オープンな形式でのグループ相談とし、産前産後の母親の身体の健康について、出産に備えての心構え、出産時の様子など、参加者からの質問を中心に助産師に話してもらう。出産へのイメージがわいて、夫婦で安心して出産を迎えるように配慮する。
  - ②0歳児の生活、産後すぐの親としての生活についても話題になれば、産後の育児生活の予想も可能になってあわてなくてもすむので、先輩親に話してもらう。
  - ③事前に大まかに、相談したい内容を知っておけば、助産師も資料を用意したり、準備をしたりしておくことが出来るので、事前に質問をもらっておくとよい。
- スタッフは助産師に任せきるのではなく、事後も助産師とよく連携をとり、親子の見守りを続けていくことが必要である。

### Ⅲ 3.

#### 3) 一時預かり・相互預かり

##### (1) 一時預かり

##### ーひろば事業とファミリーサポート 事業のドッキングプログラムー

##### 趣旨

ひろば事業の一番の良さはふらっと立ち寄り、自由に集うことが出来、心の安らぎを得られることである。ひろばでは同じ悩みや喜びを共感できる子育て仲間を作り、楽しい子育てに繋げていくことが最大の目的である。ひろば利用者の中にも、一時預かりの希望者は多い。目的は多種多様だが、ちょっとした預かり先がなく困っている人は多い。例えば歯医者や産婦人科等への通院、美容院へ行きたい、買い物に行きたい、ひろば利用の仲間達と食事会へと言うケースもある。民間の託児サービスを利用するととなると、高額な入会金、月会費などと託児料は高額になる。しかも信頼に足りるかどうか、劣悪な保育室も不安である。

ファミリーサポート事業が実施されるようになり、近隣の助け合い的なものが展開されてきている。幼稚園、保育園の送迎だけでなく、在宅育児の預かり等も行われるようになり、自治体等公的機関が行っていることから信用度も高い。

しかし、利用者にとっては必ずしも好評ではない。それは、親向けのアンケートにおいても、そのニーズの少なさからも明らかである。その課題は、事前登録、事前打ち合わせが必要で急な用事に間に合わない、自宅での保育には抵抗もあるし、援助会員宅も何となく心配ということもあげられる。単発のファミリーサポート利用は使いにくい制度の様である。

それに対して、ひろばでの一時預かりは、日頃、遊び慣れた場所で、顔なじみのサポーターが預かってくれ、安心して託すことが出来る。ひろばのサポーターの中にファミリーサポートの援助会員をおき、依頼があった時は担当者を決め、

援助会員が保育に当たれば良い。ファミリーサポート援助会員がひろばのサポーターであれば望ましい。ひろば利用者も、一緒に見守り遊んでくれるし、環境も適している。

以上のような理由から、ひろばの中にファミリーサポート事業を展開することを提案する。ひろば事業に預かり機能を持たせることにより、更なる子育て支援の充実を図ることが出来るのではないか。

##### 実施方法

##### ①対象

地域住民とし、ひろば利用者が事前にファミリーサポート利用会員の申し込みをしていることが条件となる。

##### ②進め方

ファミリーサポート事業の一部を、ひろば事業に委託する。ひろば主催団体は事業の一部にファミリーサポート事業の預かり機能を導入し、ひろばの中で利用会員を募る。一方、援助会員の希望者には保育サポーターとして登録してもらう。

ひろばの子育てサポーターをファミリーサポーター講習会に参加させ、資格を取らせる。ひろばはコーディネート機能を持ち、一時預かりの要請があった時は、コーディネートして、担当者を決め、保育にあたる。ファミリーサポート事業費は委託団体が負担する。精算事務はひろばで行い、実施状況等の報告義務を負う。

##### ③対象児の定員

ひろばの規模にも依るが、同時間内の定数を5名までし、原則的に1対1の預かりとする

##### ④利用時間

原則としてひろば開催時間内とするが、事情によってはこの限りではない

##### ⑤利用料金

ファミリーサポート事業と同料金。

##### ⑥預かる人（援助会員）

ファミリーサポート事業援助会員登録者（自治体等が行う講習会を終了したもの）で広場のサポーターが行う。

##### ⑦預かる場所

特にひろば利用者と区別することはないが、午睡できる小部屋かコーナー及び寝具等が必要

#### ⑧準備するもの

ミルク・弁当・おやつなど食物、オムツや着替えを利用者側が用意する。

#### 留意点

- ①預かる際の健康状態やミルク・離乳食の時間等を把握しておく。
- ②預かる子どもは誰が預かっているのか一般の参加者も把握できるように名札などで判るようにしておく。

このプログラムのメリットとして、以下が考えられる

- ・ひろばにおける就労の場を生み出す。
- ・親も子どもも、安心して一時預かりを利用出来る。
- ・ファミリーサポート事業の発展。
- ・行政が抱える児童虐待防止の観点からも効果的。
- ・ひろばを通して地域の交流が深まる。
- ・中高年者のボランティア活動の場。
- ・異世代交流を図ることが出来る。

#### 応用例

—ひろば事業に緊急一時保育機能をもたせる—

ファミリーサポートとのドッキングプログラムとしては、ひろば事業に緊急一時保育機能をもたせることも考えられる。

公的な保育サービスのメニューに緊急一時保育サービスがあるが、施設は定員いっぱい、職員体制が取れないなどの理由で実際に利用できないことも多い。そのような時に、緊急一時保育（虐待や各家族の突発的な事態に対応）機能をひろばに持たせることを提案する。ひろばの中に保育士やファミリーサポート事業の援助会員を置くことによって対応できると考える。多様なニーズに応えられるリソースを持つことが大きな家庭支援になり、多くの機能を持つひろばの存在が子

どもや家庭の支援に繋がると確信する。

#### 実施方法

##### ①対象児

ひろば利用対象年齢児で、緊急一時保育を希望するが、空きがない時のみ、自治体の要請で受託するものとし、定数は1名とする。

##### ②保育時間

原則として広場開催時間内とするが、事情によってはこの限りではない。

##### ③利用料金

自治体の定めによる。（自治体へ納入）

##### ④保育者

ファミリーサポート援助会員登録者又は保育士等の有資格者でひろばのサポーターが行う。

##### ⑤その他

自治体の緊急一時保育事業の規約に準ずる。

#### 留意点

ファミリーサポート事業とのドッキングにあたり、ひろば機能を侵さないよう配慮する。ファミリーサポート等の保育サポーターの保育を利用することも考えられる。自治体は緊急一時保育の要請に応じられない時に限り、ひろばの開催団体へ委託し、自治体は受託団体へ事業費を支払う仕組みを構築する。

少子化は進んでいるものの、保育所の待機児は依然として解消されない。一方次世代育成支援対策推進法で在宅育児の家庭への支援もクローズアップされ、ひろばの数多くの設立と充実を目指し、動き始めたところである。ひろばの持つ意義は大きく、住民のニーズをもっと取り込んで要望に応えられるようにしていかなければならない。

そのため、ひろばには、保育施設とは違った預かり機能をもたせることが望まれている。それが、施設の有効活用にも繋がっていく。昼間の時間帯にひろばの中で、一時預かりや緊急一時保育、ひろ

ばを閉じた後の延長保育機能、学童保育の時間外保育などへの活用へとも、広がるのではないかと考えられる。

## (2)相互預かり

### 趣旨

子どもを一時的に預けたいというニーズは多い。子どもを一時的に預けることは、親にとって大きなリフレッシュとなる。また、親自身が講座などの学びの場に参加する際、子どもを預かってもらえることで、ゆっくりと自分の学びの時間を持つことができる。

ひろばにおける親の学習プログラムや講座への参加に際して、ちょっと預ける一時預かりがとても大切であるが、自分が預かる側に立つ経験はあまりない。最近では、親同士が預けあうことに気兼ねや心配などの抵抗感を感じる親が少なくない。子どもが幼い場合など、特にそうである。そのため、他の親にちょっと預けたり、自分が他の子を預かったりする機会はあまり多くない。

他の子を預かることでの発見は意外に大きい。特に第1子の親の場合、わが子に手いっぱい他の子どもをじっくり見る機会はあまりない。そのような親が他の子を預かることによって、これまでわが子で心配していたことが、他の子も同じなのだとして理解できて安心するなど、子どもへの理解の仕方が広がる機会となる。

また、他の親に預けることから得られることも大きい。他の親に預かってもらうことによって、自分とは違った子どもの見方やかわり方、子どもの意外な面が発見できるなどがある。また、この預けあう機会を通して、普段はなかなか話せない子どもの気になっている点についての会話がはずんだり、交流が深まることもある。

以上のような意味から、ひろばで親が講座などに参加する機会に、意図的な「相互預かり」を行うことには親同士の育ち合い、支え合いを生み出す大きな意味が

あると考え、このプログラムを提案する。

### 実施方法

#### ①対象

ひろばを利用者で、「相互預かり」がセットの親向けの講座などのプログラムに参加を呼びかけ、希望してきた親子。

#### ②進め方

i 参加希望者の中からペアを作る。

ペアの組み方には、2通りが考えられる。プログラムへの参加希望段階から2組がペアになって参加する場合と、参加希望者の中からスタッフが、相互預かりの効果を考えてペアを作る場合である。

ii 自分でペアを作って参加する場合。

顔見知りや安心して預けあえる関係なので、気軽に参加できるというメリットがある。普段は仲がよくても、預け合うまではいかない場合もあるので、より関係が深まるという効果が期待される。

iii スタッフのほうでペアを作る場合。

普段は知らない親子と知り合いになるきっかけとなるなど、新しい出会いやつながりを生み出す効果が期待される。

・同じ年齢や、住んでいるところが近いなどの共通点の多い者同士をペアにすると親しくなりやすいという利点がある。逆に子どもが異年齢のペアを作ることに良い点がある。

・3歳児の親が0歳児を預かることで自分の子どもが0歳の頃を懐かしく思い出すなど、3歳児にとっても赤ちゃんに触れる良い機会になる。0歳児の親にとっては少しお兄さんお姉さんの子どもに接することで、この先の発達の見通しを持てるようになる。

・それぞれの利点を知った上で、普段の利用者の様子を良く知っているスタッフが良い出会いとなるようにペア作りすることが必要である。

・ひろばの親子の置かれた状況から判断して、ペアで参加してもらうか、スタッフがペアを作るかの2通りの方法を使い分けることが望ましいと考えられる。

具体的な展開として例を挙げる。

### ③活動例 1 (基本型)

i ひとつのプログラムの参加人数は10組程度。同じプログラムが2回に分けて構成され、ペアのどちらかが前半、もう一方が後半に参加する。参加しない親が、ペアの参加している親の子どもと自分の子どもをひろばで見る。

ii 3～4人のスタッフがサポートに入ることが望ましい。プログラムの時間は40～50分以内が適当。お茶やリラクゼーションなど、親自身が子どもを預け、ゆっくりとした時間を過ごすことのできる内容が良い。

iii 最初と最後にペア同士が話し合う場を持つ。自分の子どもを預かってもらう際に、伝えたいことを伝える。スタッフの担当を決めておき、何かあったらサポートすることを伝えておく。最後には預かっているときの様子などを報告しあう。その場に、担当となったスタッフも同席する。

### ④活動例 2 (短時間型)

i 短時間の単独で参加するプログラムでの「相互預かり」。例えば15分のハンドマッサージなどに一人ずつ交代で参加する。

ii プログラム1よりも短時間であり、初めて子どもを預ける場合や、親子がまだひろばに来て日が浅い場合、ひろば側で「相互預かり」のサポートに付く人員の足りない場合などにも実行可能なプログラムである。短時間であるため、親も参加しやすいと予想される。最初と最後の話し合いはプログラム1と同様である。

### ⑤活動例 3 (グループ型)

i プログラム1と同様の形態で、ペアに分けずに、5人の親が10人の子どもを見る方法。スタッフが3～4人。この方法には子ども同士、親同士のかかわり合いがあるなど、集団のおもしろさがあるが、このプログラムを行うために、1室

区切られた空間が必要となる。

### 留意点

①わが子を預けるのがはじめての親子が多いため、預かる親が負担を感じたり、預けられる子どもに無理がかからないような工夫が大切となる。特に、預かる場所、スタッフの助け、時間などきめ細やかな配慮が必要である。

②これまで預け合いを経験していない人が、このプログラムに参加してみようと思うことは、大きな決断である。そのような決断をしたものの、預かった子どもや自分の子どもがずっと泣いたり、怪我をしたり、機嫌が悪くなったりして、悲しく負担の多いものとなることを、できる限り回避する必要がある。

③むしろ、この預け合いを行うことで、子どもを見合うのはおもしろい、楽しみであると受け止めてもらうよう、スタッフの配慮が必要である。プログラムにあるように、5ペアにスタッフが3～4人付くのは、非常に多いと感じられるかもしれないが、それだけ手厚いサポートが必要不可欠なのである。

④親子の様子を見守り、必要なときには手を貸し、必要のないときには離れて見守るような熟練したスタッフの存在が必要である。「相互預かり」の後に、スタッフ間でミーティングを持ち研鑽を積むことが、プログラムの質を高めていく上で求められる。

このプログラムは、単に講座の合間に預け合いを行わせることが合理的だという性格のものではない。あくまでも、親同士が預けあうことを通して、自分の子育てに新たな発見をすることや、子育てを共にしていくことの喜びや安心感が得られることが目的である。そのような親同士の支え合いを、その下からサポートするのが、このプログラムを行うひろばスタッフの役割である。